



新聞雑誌定文化財 責任者一團画
(岡田清制作)



岡田佐平治



二宮尊徳

報徳思想と大日本報徳社の歴史

幕末から明治に至る日本の近代化黎明期、二宮尊徳の唱えた報徳思想の普及をめざし、道徳と経済の調和、実践を説き、困窮にあえぐ農民の救済をめざした報徳運動が全国に広まりました。

尊徳高弟の岡田良一郎の力強い指導による活動が盛んだった掛川は、やがて全国の大日本報徳社が開設されたのです。「大日本報徳社」が開設されたのです。報徳運動の創始である二宮尊徳は功名を金貨思想といひ、少年時に両親と死別。以後、貧しい暮らしの中で勤労に励み、儉約を重ねながら、かたわらでは独学で豊かな幅広い見識を育み、やがては、全国各地の医業した農村の救済にその手腕を発揮することになりました。彼愛した農村を救済すべく全精力を傾け、その行動から芽った知志を、二宮尊

徳が体系的思想として唱えたものが「報徳の思想」です。報徳の思想は、たんなる説法や論理ではなく、江戸末期の日本の農村現実に即した実践的なもので、理論は行動と一体をなし、さまざまな生活様式（住法）として体系化されて人々の暮らしに定着してゆきました。

人間の欲を認めながらも、しかし困りとたくみに調和させながらも、心も金も同時に豊かに育もうという、この優れた実践思想は、やがて農村救済という神を大きく超えて幅広い分野に浸透しました。浪沢栄一、安田善次郎、豊田佐吉、松下幸之助、上光敏夫をはじめとする、多くの事業家たちにも多大な影響を与え、など、歴史的・世界的見地からみても卓越して洋道を報徳の思想は、今も賑々と社会に息づいています。

掛川に根づいた報徳運動の歴史

江戸末期から幕末にかけて、各地の農村を救い、農村生活安定化に貢献した実学的な手法として全国に拡大した報徳の運動は、明治維新以後、各地に結成された「報徳社」の活動に引き継がれ、より一層の普及が進みました。とりわけ、その活動が隆盛をきわめたのは、掛川を中心とした東州地方です。

二宮尊徳から直接の教えを受けた岡田佐平治と、その息子、岡田良一郎が中心となって継り広げられた掛川藩領内の農村復興の努力は、やがて明治8年（1875年）の遠江国報徳社創設に結実し、さらに明治期の近代化促進の流れに呼応し、遠州地方の地域振興に大きく貢献することになりました。また産業への寄与にとどまらず、岡田父子らによる報徳運動は、教育にも



責任者良平



一木興徳

深く関わっていました。岡田良一郎が問いた私塾は、やがて東北学会へと引き継がれて、明治17年までこの地の人材育成を担いました。岡田良一郎の息子である岡田良平、一木興徳も、東北学会で父の教えを受けて学び、やがて回政を担うに至るなど、東北学会は遠州地方のみならず、日本の近代化の担い手となった多くの人材を輩出した学会として、今も語り継がれています。